

一から学ぶ海ごみ講座 開催しました！



- 日時 令和5年1月28日（土）10：00～12：00
- 会場 観音寺市総合コミュニティセンター、有明海岸（観音寺市有明町）
- 講師 森田 桂治 氏 （NPO法人 アーキペラゴ理事）
- 講師アシスタント 廣瀬 早起 氏 （ダイビングショップ ブルーブルー代表）

1月28日（土）、観音寺市総合コミュニティセンター、有明海岸にて、「一から学ぶ海ごみ講座」を開催し16名が受講しました。本講座では、瀬戸内海のごみの現状について座学とフィールドワークを通じ、里海に対する関心を高め、里海づくり活動に参加するきっかけとなることを目的として開催しました。

はじめに、講師よりクリーンアップ活動の紹介や活動に対する想いを語っていただきました。最近では活動に参加する人も増え、海ごみも減ってきているようですが、依然として海ごみがたまりやすく、汚れた場所もあるそうです。しかし、森田氏にとって海ごみがたまりやすい場所は、見方を変えると大量の海ごみを一度に回収出来る“チャンスな場所”であるというお話があり、受講者は熱心に耳を傾けていました。また、クリーンアップ活動の課題として、瀬戸内海の島々ではボランティアが活動に参加しにくいことや、海ごみの処分費用の問題があり、海ごみが放置されたままになっている場所もあるそうです。

次に、海ごみについての座学が行われ、世界の海ごみの内訳、瀬戸内海のごみの量、瀬戸内海のごみの特徴についての解説がありました。中でも“まめ管”と呼ばれる牡蠣の養殖で使用されるプラスチックごみが瀬戸内海のごみでは多いことなど、受講者は気づきを得た様子でした。



次に、「海ごみが増えると誰が困る?」、「海ごみをそのままにしておくとうどうなる?」という講師からの質問に対してグループで意見を出し合い、代表者が発表しました。海ごみが増えると海の生きものが困るという意見が多く、漁網やリング状のプラスチックに絡まって動けない状況を網や輪ゴムを使って体験し、受講者は海ごみの危険性について改めて気付かされた様子でした。また、海ごみをそのままにしておくマイクロプラスチックと呼ばれる5mm以下の小さな破片になるというお話の後、実際にマイクロプラスチックの仕分けを行いました。破片化したプラスチック、レジンペレット（プラスチックの原料）、クッション材、肥料カプセル、人工芝破片などに分けることができ、細くなったマイクロプラスチックは回収が困難なため、大きいうちに回収することが大切というお話がありました。



有明海岸に移動し、講師より注意事項を聞いた後、海ごみ拾いを行いました。講座当日は風も強く、気温も低い中でフィールドワークとなりましたが、受講者たちは海ごみ拾いに夢中な様子でした。その後、拾い集めた海ごみの仕分けを行い、どのような海ごみが多いかをグループで話し合いました。食品トレイ、発泡スチロール、牡蠣の養殖パイプなどが多く、中でも高松の方ではあまり見かけることがない長い牡蠣の養殖パイプなど珍しい海ごみについての解説もありました。



観音寺市総合コミュニティセンターへ戻り、振り返りを行いました。講師より、「海ごみの大半はプラスチックなどの生活用品で、瀬戸内海のごみは太平洋へ流出し、生き物に悪影響を与えている。目の前の海岸を綺麗にするということは、遠くの世界を綺麗にすることと同じである」というお話がありました。その後、「私たちが出来ることは何だろうか?」という問いかけがあり、受講者からは、「ボランティアに参加する」、「ごみの分別や必要ないプラスチックを使わない」などの意見が挙がり、日常生活を見直す大変有意義な講座となりました。

